

童話 幸福の王子様 (つゞき)

—— オスカア、ワイルド作 ——

東京女子高等師範學校教授

津 田 芳 雄

六六

「所がエヂプトの方で私を待つてゐるんです。明日は私の友達は第二の瀧の所へ飛んで参りませう。其處には葦の間に河馬が屈んでゐて、大きな御影石の王座の上にはメムノンの神様が座つて居られるのです。メムノンの神様さいふのは夜通し星を眺めていらつして、朝の星が光り出すさいふの叫び聲を出して、それから黙つておしまひになるのですよ。お午には黄色い獅子が水ぎはに水を飲みに下りて参ります。獅子は緑柱玉のやうに緑色をした眼を持つてゐて、吼える時には瀧よりも大きい聲を出すのですよ」

と燕は申しました。

それでも王子様はかう仰有いました。「燕や、燕、小さい燕、市街のすつゝ向ふの方に屋根裏部屋にゐる一人の青年が見えるんだよ。その人は書き物の一杯載つかつた机に

よりかゝつてゐて、傍の水呑には一束の葦が凋びてゐる。

髪は毛は鶯色で縮れて居り、脣は石榴のやうに赤くて、眼は大きい、夢を見てゐるやうな眼をしてゐる。その青年が今、劇場の監督に約束した劇を書き上げようとしてゐるが、もうさても寒くて書けなくなつてゐる。爐には火がなくなつたし、お中は空いて倒れさうになつてゐるんだよ」

「それではもう一晩泊めて戴きませう。その人にもう一つの紅玉を持つて参りませうか」と燕は申しました。實は燕も心はやさしいのでした。

「あー、所が紅玉はもう無いんだよ。残つたのは眼だけになつた。この眼は極上の青玉で出来てゐて、千年前に印度から持つて來られたものなんだが。これの一つだけ引つこ抜いてあの青年に持つていつておくれ。そしたらあの青

年はこれを寶石屋にでも賣つて、食べ物や薪を買つて劇を書き上げてくれるだらう」ミ王子様が仰有いました。

燕は「ねえ、王子様、それは出来ません」ミ云つて、しくしく泣き出しました。

王子様は「燕や、燕、小さい燕、僕の云ふ通りにしておくれ」ミ仰有いました。

それで燕は仕方なく王子様の眼を一つ引つこ抜いて、青年の屋根裏部屋へ飛んで行きました。するミ屋根に一つ穴がありまして、這入るのはわけありませんでした。燕はその穴から部屋へ這入りますミ、青年は両手に頭を埋めてゐるのです。そして燕の羽ばたきも青年には聞えないのです。そして顔を上げた時に漸く、凋びた葦の上に置かれた美しい青玉を見つけたのでした。

青年は吃驚して叫びました「僕はだんく認められて來たのだ。これは誰か偉い、僕の崇拜家が呉れたんだ。これで僕も劇が書き上げられる」そして彼は如何にも嬉しきうな顔をしました。

翌日燕は港へ飛んで降りました。そして大きい船の帆柱

にしまつて、水夫達が綱でもつて船艙から大きい函を曳上げるのを眺めました。水夫達は函が一つ宛上つて來る度に「よいせーら」ミ掛聲してゐました。燕は水夫達に「僕はこれからエヂブトへ行くんだよ」ミ申しましたが誰も注意して呉れませんでした。そして月が上つた時王子様の所へ飛んで歸りました。

「お暇乞ひに參りました」

燕が申しますミ、王子様はまた「燕や燕、小さい燕、もう一晚僕の所に泊つて呉れないか」ミ仰有いました。

燕は「もう冬なんです。やがて冷たい雪が降つて參りませう。エヂブトでは暖い日が緑の棕櫚にさしてゐます。

鰐魚ワニは泥の中に臥て不精げにあたりを見廻してゐます。私の友達はパールベックのお寺に巢を作つてゐて、白地に桃色の斑のついた鳩がそれを眺めて、クウクウ鳴き合つてゐませう。ねえ、王子様、私はもうお暇致します。だけれど私は王子様のことは決して忘れません。來年の春になりましたら、王子様がお與マりになつたのに代る二つの美しい寶石を持つて來て差し上げます。その紅玉の方は赤い

ばらよりも赤うぐいませう。そして青玉は大海のやうに碧うぐいませう」

するに王子様は「この下の廣場に小さいマッチ賣娘があるんだよ。あの子はマッチを溝の中におっこして、全部駄目にしてしまつてゐる。あの子のお父さんは幾らかお金を持つて歸らないとあの子をぶつものだから、あの子は泣いてゐる。靴もはかず、靴下もはかず、帽子もかぶつてゐないんだよ。お前、僕の今一つの眼を引つこ抜いてあの子にやつてお呉れ。そしたらお父さんもあの子をぶつまいから」
「こ仰有いました。」

するに燕もお暇出来なくなつて「では、もう一晩泊めて戴きます。ですが王子様のたつた一つのお眼を引抜くわけに参りません。王子様がすつかり盲目メクラになつておしまひになりますから」
「こ申しました。」

けれども王子様は「燕や燕、小さい燕、僕の云ふ通りにしてお呉れ」
「こ仰有るのでした。」

燕は仕方なく王子様のたつた一つの眼を引つこ抜いて、それを持つて矢のやうに飛び下りました。そしてスウツミ

マッチ賣娘の側を飛び過ぎざまに、その寶石を娘の手のひらに入れてやりました。娘は「なんて綺麗な硝子玉だらう」
と云つて、笑ひ聲を立て、家へ駆けつて歸りました。

それから燕は王子様の所へ歸つて来て、「王子様はもう盲目におなりになつたから、私はいつまでも王子様の所に居ります」
と申しました。

王子様は「いや、小さい燕や、お前はエヂプトへお歸り」
と仰有いました。

けれども燕は「私はいつまでも王子様の所に居ります」
と云つて王子様の足下に眠りました。

翌日は燕は一日中王子様の肩にこまつて、色々異國で見たことをお話しました。ナイル河の岸に長い列を作つて、嘴で金魚を捕へる紅鏢鷺ベニカマヤサギの話や、この世界の出来た太初ハジメから生きてゐて、今も沙漠に住んで居り、何でも知らないことのないさいふスフィンクスの話や、駱駝の側をのろりのろり歩いて、手に琥珀の珠數玉を持つて居る商人達の話、それから黒檀のやうに黒くて、大きな水晶を拜む月の山の王様の話、棕櫚の木に眠つて、蜂蜜のお菓子を食べるのに

二十人のお坊さんをかしづかせて居る緑色をした大蛇の話、大きな湖を渡るのに平い大きな葉に乗つて行き、始終蝶々達と戦争をして居るこいふ一寸法師達の話など、色々珍しい話を王子様にお聞かせしました。

王子様はそれをお聴きになつてから申されるには「ねえ、燕や、お前は随分珍しいこきを聞かして呉れたが、何より珍しいこきは人間の苦しみのこきだよ。不幸程不思議なものはない。ねえ燕や、この市街マチの上を飛んで、お前の目のついたこきを僕に知らしてお呉れ」

そこで燕が市街の上を飛んで廻ります。あちこちで、お金持の人達は立派な家の中で大騒ぎして宴會をしてゐました。一方では乞食達がその門の所に坐つてゐました。暗い路地に入つてみるに、飢えた子供達の青白い顔が外の暗い通りをぼんやり眺めてゐました。橋の下のアーチの下には二人の男の子が抱きあつて臥て、體を温めようとしてゐました。「お中が空いたなあ」二人は申すのでした。するに夜廻りのおぢさんが其處へ来て、「こら、此處に臥ちやいかんぞ」を申しましたので、二人は雨の降る中へあても

なく出て行きました。

それから燕は王子様の所へ歸つて来て、さういふ目にしたこきをお話しました。

するに王子様は「僕の體には一杯金が被せてあるからね、お前はここの金を一枚一枚剥ぎ取つてその貧しい人達にやつてお呉れ。生きた人達はいつもお金さへあれば幸福になれると思つてゐるから」を仰りました。

そこで燕はその金を一枚一枚剥ぎ取つて、王子様をすつかり、くすんだ灰色にしてしまひました。そしてそれをまた一枚一枚貧乏な人達に持つていつてやりました。するに子供達の顔は段々色になつて、通りで笑ひさんざめきながら遊ぶやうになりました。子供達は「もうパンが戴けるやうになつたんだ」を云つて喜ぶのでした。

それから雪が参りました。そしてその後からまた霜が参りました。街々は銀で出来たやうにピカ／＼ピカ／＼光りました。家々の軒からは水晶の劍のやうな長い氷柱ツラが垂れました。人は皆毛皮にくるまつて歩くやうになり、小さい男の子達は紅い帽子を被つて氷の上でスケートをするやう

になりました。

燕は可哀相に段々寒くなつて來たのです。けれども王子様から離れようとは致しませんでした。燕は王子様が好きで、そんなことはとても出來ないのでした。彼はバン屋が見てゐない時にその店の外に落ちてゐるバン屑を拾つたり、羽ばたきをして體を温めようこしたり散々苦勞致しました。

けれども、たうとう燕も自分の死ぬ時が來たことを知りました。その時はもうやつと王子様の肩へ今一度飛び上るだけの力しかありませんでした。燕は力の無い聲で申しました「さようなら、王子様。お手にキッスをさして下さいませんか」

王子様は「燕や、漸くお前がエヂプトへ行く氣になつたのは嬉しい。お前は此處に居るのが長過ぎたよ。だけれどキッスは僕の唇にしておくれ。僕はお前が好きなんだから」を申されました。

「私が参りますのはエヂプトではないのです。私は『死の家』へ参るのです。『死』は『眠』の兄さんでございませう」

燕が申しました。

そして燕は幸福の王子様の唇にキッスをして、王子様の足下に倒れて死にました。

その時何か割れるやうなバチンといふ妙な音が王子様の像の内側から聞えました。それは王子様の鉛の心臓が眞二つに割れたのでした。確かにひびき霜だつたのです。

翌朝早く市長さんが市會議員達と一緒に下の廣場を歩いてゐました。そしてこの圓柱の臺の下を通る時に市長さんは「おや、幸福の王子様は何てみすばらしい様子をしていらつしやるだらう」を申しました。

「本當に何てみすばらしいことだせう」市會議員達も申しました。この人達は何時も市長さんの説に賛成するのです。それから皆で上へ登つて王子様の像を見ました。

「おや、紅玉が劍から落つてゐる。眼も無い。そして體ももう金色でなくなつてゐる。はあ、これぢや乞食みただ」市長さんは申しました。

「本當に乞食みたいですね」市會議員達は相槌を打ちました。

「そして此處には王子様の足下の所に鳥が死んでゐる。

鳥はこんな所で死んではいけないといふお布令フレを出さなくちやならんね一市長さんはまた申しました。するに市の書記が、早速にその意見を書きこめました。

それから幸福の王子様の像が引下されることになりました。大學の美術の先生が幸福の王子様の像は美しくなくなつたから、もう役に立たないを申すのでした。

そして王子様の像が爐に入れられて溶かされることになりました。また市長さんはその地金の始末を決めるために市會を召集致しました。そして「我々は勿論また新しく像を造らなければならぬのであるが、今度の像はこの我輩の像を造ることに致さう」と提議しました。

するに今まで市長さんの云ふことには何でも賛成してゐた市會議員達が、皆それ／＼「いや拙者の像を造ることに致さう」と云ひ出して争ひました、私が最後にその人達の議論を聞いてゐた時まで、まだその人達は言ひ争つて居りました。

一方鑄造場では職工監督が「何て不思議なことがあるも

のだ、この割れた鉛の心臓はさうしても爐の中で溶けないぞ。捨てるよりほかに仕様がなね」と申しました。そして職工達にこの鉛の心臓を塵棄場に投げ棄てさせてしまひました。其處には死んだ燕も捨てゝあるのです。

やがて天の神様が一人の天使に仰せになりました「この市街で一番貴い物を二つだけ私の所へ持つて来ておくれ」するにその天使はこの鉛の心臓と死んだ鳥を神様の所へ持つて参りました。

神様は大變お喜びになつて「お前は良い物を選んで来て呉れた。私の天國の庭へ來たらこの小鳥はいつまでも歌を歌つてくれるだらう。またこの幸福の王子は私の金の市に來たら、いつまでも私を讚美メカクへてくれるだらう」と仰せになりました。

をほり